
闇夜と心の漆黒

由宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇夜と心の漆黒

【Nコード】

N1750B

【作者名】

由宇

【あらすじ】

更新停止中親友ケイトをキート族に殺されたルースは、キート族への復讐を誓った。何年もかかって調べあげたキート族の情報をもとに、旅にでようとする。しかし、それほど強くないルースは、力がほしくて禁断の術へと手を伸ばす。――悪魔召喚召喚に成功した、彼女の前にあらわれた悪魔は……

プロローグ（前書き）

更新亀

プロローグ

プロローグ

黒くて、大きいものがいくつも横切った。

目では見えない、一瞬のことだったから、二人の心臓は破裂しそうなくらいに膨れ上がった。

空にはただ何億個もの星が輝き、瞬いている。

そうか、こんな時間に外にでたのが間違いだった。

自分達に限って、偶然《奴ら》に襲われることはないと彼女等は油断していた。

——甘すぎた。

気付けば、まわりを《奴ら》に囲まれていた。

宵闇に紛れる、闇のように黒い物体が、いくつも周りにたっていた。奴らの黒いローブが、風にゆれている。

「キート族……」

少女の一人が口を開いた。

この闇にはあわない、夕日色の髪の毛を短く切った、背の高い少女だった。

その青空色の瞳には、邪悪な黒い闇がいくつも映っている。

「ごめん、私が油断していた」

その少女は、もう一人の、黒く長い髪を垂らした少女の小さな手をつかんだ。

かばうように、そのしなやかな白い腕で、黒髪の少女を包んだ。

黒髪の少女が、震えていることを確認すると、彼女は

場に合わない明るい声で、

「大丈夫。私運良く短剣もってるから。私が奴らを引き付けるから、あなたは逃げなさい」

「ケイトお姉ちゃん……」

少女の不安げな声に、ケイトは安心させるかのようにほほえんだ。

「私の剣の腕、しってるでしょ？ ……よし、大丈夫」

ケイトは、黒髪の少女から手を離し、じりじりと近づいてきている、キート族をキツとにらみつけた。

「うあああ——！」

ケイトは、太ももに装備していた短剣を抜くと、キート族の一人に斬り掛かった。

キート族が、そっちに集中している間に、黒髪の少女はきびすをかえし、逆方向へ走った。

風がビュンビュンと、耳元で獣のようにうなる。自分が出せる力以上、速く走れた気がした。

それと同時に、目からは熱い雫がこぼれ落ちてくる。

遠くからは、たくさんのかき声がかきこえてきている。

——甲高い、女性の声も。

少女は、耳をふさぎ走り続けた。

叫び声がかき声のものだったとしても、少女は信じた。

きつとキート族を倒し、また自分を抱き締めてくれることを——

第一章 1

それから五年後――

ここ、ヴェルツェーリウス王国の、ある小さな町の外れに……。

虹のように、七色に花は咲いていた。

暖かな日差しが降り注ぐ昼下りの、花畑に――

「キート族は人間を襲うことで快感を得る、魔物。そして、キート族を生み出しているのが、この世界のどこかに潜んでいる、キート族の王、通称ガーログウス……か」

花畑の中に、黒い少女が岩に腰をおろし、何やら赤い本にかかれた内容を、懸命に目でおっていた

少女は、長く漆黒に染まる髪を耳元で二つに結び、銀の十字架の模様が入った、黒のタンクトップ、そして同じく黒いミニスカートをはいていた。スカートからは編みタイツに包まれた、細い足がのびている。

「王にあうには、五人のある特別なキート族がもつ、呪玉を手にいれなければいけない……よし、完璧」

そういうと、黒い少女――ルースは、岩から力強く立ち上がった。

黒色の瞳に、青空を写しながら、

「ケイトお姉ちゃん……」

ルースは五年前、ケイトと共に夜、星をみに出掛けたところ、運悪くキート族に出くわしてしまった。

まだ幼かったルースをかばい、ケイトは複数のキート族と戦ったが、未だにルースの元には帰ってきていなかった。

それは、ケイトの死を意味する……あれ以来、キート族への復讐のため、ルースは学校で習う防衛術の他にも、ケイトが得意としていた剣術、そして魔法を覚えた。

しかし、どうしても強くはなれなかった。

たくさん技を覚えても、一つ一つが弱ければ意味がない。

「ケイトお姉ちゃん、私はどんな手を使っても、キート族を滅亡に
おいこんでやるから！」

ルースは何かを決意したように、ぎゅっとこぶしを握り締めた。

そして、赤い本を胸にかかえ、結んだ黒髪を揺らしながら、花畑に
伸びる、一本の道を駆けていった。

第一章 2

自分を主張するかのように咲き誇る花を踏まないように気を付けながら、ルースは花畑をでた。

天に輝く太陽をみつめ、住宅地のある北の方角にへと走ってゆく。競い合うようにして天にのびる^{つた}蔦の家、そして赤レンガでできた、まるで光沢がたっているかのような家の間を、ルースは走った。

人々は、この見慣れたはずの景色を楽しむかのようにゆつくりと歩いている。

ルースはそれが気に入らなかった。キート族が出没するこの世界に、楽しみや幸せは不似合いだった。

そうだ、こいつらはきつと自分の身近な人間を殺されていない奴らなんだ。

だから、キート族を甘く見ている、笑ってられる。

知らずの内、ルースの目には涙がたまっていた。

当然のようにこぼれ落ち、乾いた地面へ吸い込まれていった。

手のなかの赤い本を、強く握り締める。

——キート族は繁栄力が弱い。

そう知ったのは、つい最近。

キート族の情報を調べあげ、この本に書き記した。

繁栄力が弱いなら、今のうちに絶滅させてやる！

ルースの想いは、また涙となってあふれだした。

ルースは涙を拭い、足を止めた。

ゆつくりと顔をあげる。

目の前には——この町唯一の図書館があった。

クリーム色のレンガに、銀色に縁取られた時計。

そして赤く塗られた屋根はまるでお伽話にでてくるお城……ような作りのそこは、ひっきりなしに人々が入り出している。ルースも、同時刻にきたとみられる、白いエプロンを着た、主婦の後ろにつづ

いた。

木の扉をあけると、年季が入ったような、耳に残る甲高い音が響いた。同時に、図書館独特の匂いが、ルースの鼻腔をついた。

埃と、苦い匂いが交ざった、知的な香。

熊や大鳥の模型が飾られている、その玄関をぬけ、ルースはくいつと顔をあげた。

――本、目の前に広がる本の壁。

首が痛くなるくらいに高い天井までつづく、本の壁のよこには、木製の階段が、螺旋状に渦巻き、天井へとのびている。

そんな階段の所々には、老若男女、思い思いのカラフルな服に身を包んだ人たちが、本を手に取り、静かに読書を続けている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1750b/>

闇夜と心の漆黒

2010年10月28日06時38分発行